

演題番号

小学校の給食時間における食育の実践 紙芝居「きれいな食べ物にチャレンジ!!」の実践報告

事務局記入)

あべけいな
○安部景奈, 赤松利恵 (お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科)

【目的】 低学年児童を対象とした学校給食の食べ残しの指導に用いる紙芝居教材を現場で実践した。ここでは、学校栄養士と担任の教材に対する評価を報告する。

【方法】 2011年9～12月、都内公立小4校の1・2年生7クラス204人を対象に紙芝居教材による介入を5日間行った。また、各校の栄養士と対象クラスの担任に、紙芝居実施直後と3ヶ月後に質問紙調査を実施した。

1) 紙芝居教材による介入

紙芝居は社会的認知理論を応用して作成した。ストーリーは、主人公が嫌いな食べ物を「工夫」して食べることで効力期待(セルフ・エフィカシー)を高め、さらに、残さず食べたことで起こる「いいこと」に気づくことで結果期待を高め、最後には、特別な工夫をしなくても食べられるようになるというものだった。紙芝居は1日4枚で完結するように分けて5日間行った。また、指導者用に解説書を作成し、紙芝居の使い方や注意点などに加え、セルフ・エフィカシーを高めるための指導について記載した。各校の栄養士は、紙芝居の使い方について研究者から指導を受け、解説書の内容を担任と共有した後、5日間、給食時に紙芝居を実施した。

2) 質問紙調査

①紙芝居実施直後

担任を対象に、紙芝居教材のわかりやすさ、紙芝居実施時の児童の様子や理解度、セルフ・エフィカシーを高める指導の実施状況、食べ残しを減らすことに役立つかなどについて、評定法でたずねた。また、紙芝居教材の良い点・改善点、児童の反応や変化については自由記述でたずねた。栄養士には、紙芝居教材の実施状況、児童の反応や変化、紙芝居教材の良い点・改善点、今後も指導を行いたいかなど

について、自由記述でたずねた。

②紙芝居実施3ヶ月後

担任を対象に、紙芝居を実施してからの3ヶ月間におけるセルフ・エフィカシーを高めるための指導の実施状況と、児童の変化についてたずねた。栄養士には、紙芝居を実施してからの3ヶ月間に、給食の食べ残しについての取り組みを行ったかをたずねた。

【結果】 対象者は、児童204人(男子120人、女子84人、1年生106人、2年生98人)担任7人(男性2人、女性5人)、栄養士4人(女性4人)であった。紙芝居実施直後の担任の質問紙調査では、回答者の全員が、紙芝居教材はわかりやすかった、児童は紙芝居に集中していた、児童は紙芝居の内容を理解していたと回答していた。栄養士からも、今後も今回のような指導を行いたいといった前向きな意見が得られた。児童の変化について、担任からは「鼻をつまんだりして頑張る子どもが増えた」、栄養士からは「苦手な食べ物も頑張って食べてみようという意識が高まった」などの回答が得られた。紙芝居実施3ヶ月後の担任の質問紙調査では、全員が「嫌いな食べ物を食べられる児童が増え、今も維持されている」と回答していた。

【結論】 担任ならびに栄養士から、紙芝居教材に対して肯定的な評価が得られた。また、苦手な食べ物に対する児童の意識や行動の変化がみられた。

(連絡先)

安部景奈 g1040523@edu.cc.ocha.ac.jp

〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1

お茶の水女子大学大学院

人間文化創成科学研究科 赤松利恵気付

Tel & Fax: 03-5978-5680